3年間を通した取り組みについての評価

14期生担任　吉備豊　工藤泰三　塗田佳枝　本弓康之

14期生3年間の取り組みに対しその教育的効果について評価を行った。宿泊を伴う学校外での活動はどの活動も印象度が7割以上と高く、教員の期待した教育的効果が高く反映されていると考えられる。また、教科「産業」では、卒業研究の印象度が高く、自分で課題を見つけ自分で試行錯誤しながら問題を解決した活動に対し、生徒は達成感や成就感を感じていると考えられる。

キーワード：　信頼関係　達成感　成就感

1．はじめに

本校は、1年次入学直後のコミュニケーションキャンプ、2年次校外学習を実施するなど、独自の教育活動を行い研究成果を報告している。

これらの活動は、学校としての基本方針は決められているものの、その運用は担任団に任されているため、各学年団が独自に企画・実施している。また、1年次「産業社会と人間・産業理解」、2年次「起業基礎」、3年次「卒業研究」についても、担任団が中心となり授業内容を決め実施している。さらに、本校では、担任は3年間を通して1つの学年を担当している。

そのため、これらの活動や授業は、3年間を通した学年活動と考えることが出来る。この3年間を通した学年活動は、他の学校行事や授業と異なり、長期間生徒と関わる活動であるため、生徒間の信頼関係、教員と生徒間の信頼関係、生徒個人の成長に大きく関わる活動であり、特に、1年次「コミュニケーション・キャンプ」は本校での学校生活を円滑におくるために必要不可欠な活動となっている。

そこで、卒業直前の3年次生にこれらの活動に対するアンケート調査を行い各活動の印象度を調べ、期待した各活動の教育的効果について評価を行った。

2．14期生の取り組み

①宿泊を伴う学校外での活動

14期生は、1年次「コミュニケーション・キャンプ」、2年次「チャレンジキャンプ」・「校外学習」の3つの宿泊を伴う学校外での活動を行った。

特に「コミュニケーション・キャンプ」及び「チャレンジキャンプ」の取り組みでは、生徒に強い精神的・肉体的な負荷を与えることで、生徒間の信頼関係や生徒と教員間の信頼関係を築き、生徒に達成感や成就感を感じさせ、自己肯定感と未来志向の力を養うことを目標とし実施した。また、「校外学習」では、交流会等の学習活動を重視するとともに、生徒が楽しく活動できるように余裕のある日程を設定した。

②教科「産業」

本校の「卒業研究」は、高校生活3年間の学びの集大成ととらえ生徒に指導している。14期生は特にこの学びの集大成であることを強く強調し、生徒が自主的に卒業研究に取り組むように指導した。

3．アンケート調査

14期生の活動評価として12月中旬に実施した。この調査では、とてもあてはまるを5、あまりあてはまらないを1として、5段階評価で行い、また、その理由について記述させた。

特に、この調査では3年間の振り返りとして各活動がどの程度生徒の印象（思い出）に残っているかに着目し、各活動の効果について評価した。

①宿泊を伴う学校外での活動の印象度

宿泊を伴う学校外での活動である、1年次「コミュニケーション・キャンプ」、2年次「チャレンジキャンプ」、2年次「校外学習」の3つの活動について、図1によると7割近くの生徒が印象に残っている活動だったと答えている。

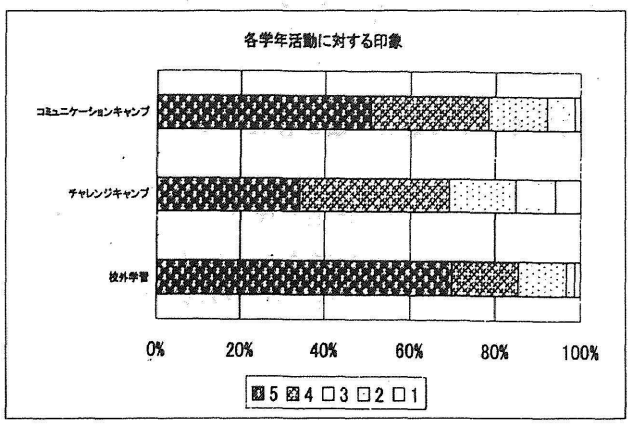

図1　アンケート結果①

この結果から、入学直後に実施する「コミュニケーション・キャンプ」や「校外学習」の印象度が非常に高いことから、これらの活動が生徒の記憶に残る活動であると考えられる。

また、図2の「実際に行ってみて良かったと思うか」とのアンケート項目について、図1と比較すると、「チャレンジキャンプ」のみ、図1の満足度と大きな違いが見られる。

これは、距離の長い登山道を歩き、さらに、先の見えない森の中を歩くことで、生徒へ精神的・肉体的な負荷をかけることを目的に登山を企画したことが大きく影響したと考えられる。

そのため、生徒のキャンプ自体への満足度は高かったものの、登山道の距離が長く先が見えなかったため、肉体的・精神的な負担を強く感じたため、この評価が低いと考えられる。

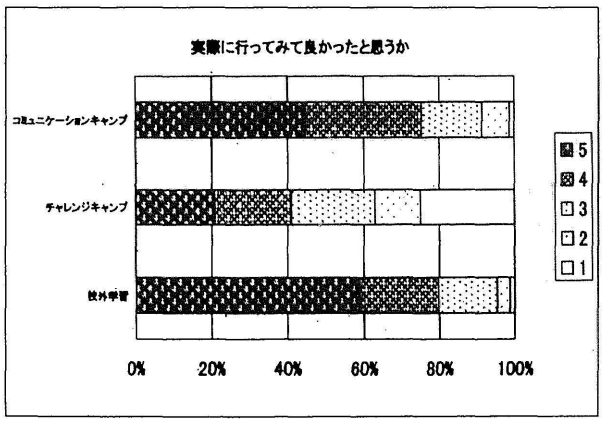

図2　アンケート結果②

②「コミュニケーション・キャンプ」項目の印象度

図3は「コミュニケーション・キャンプ」で実施したプログラムの印象度の高いものから順に並べたものを示している。「マウンテンバイク」「アイスブレイク」はクラスをこえたグループで活動するもので、その他の活動はクラス単位、学年単位での活動である。

図3の結果によると、精神的な負荷を伴うグループ活動であるプロジェクトアドベンチャー（PA）のアイスブレイク等よりも肉体的な負荷を伴うマウンテンバイクの活動のほうが、印象度が高い。

これは、長い距離をマウンテンバイクで走ったことへの達成感を強く生徒が感じている証拠であり、また、このプログラムはグループの一員としての自分を常に意識するため、グループとしての成就感も生徒が感じたものと考えられる。このグループの一員としての自分という考え方は、PAであるアイスブレイク等の活動の中に含まれている。

そのため、「コミュニケーション・キャンプ」のマウンテンバイクによる活動とアイスブレイク等による活動の2つを行うことは、このキャンプを行う上で効果の高い組み合わせであると考えられる。

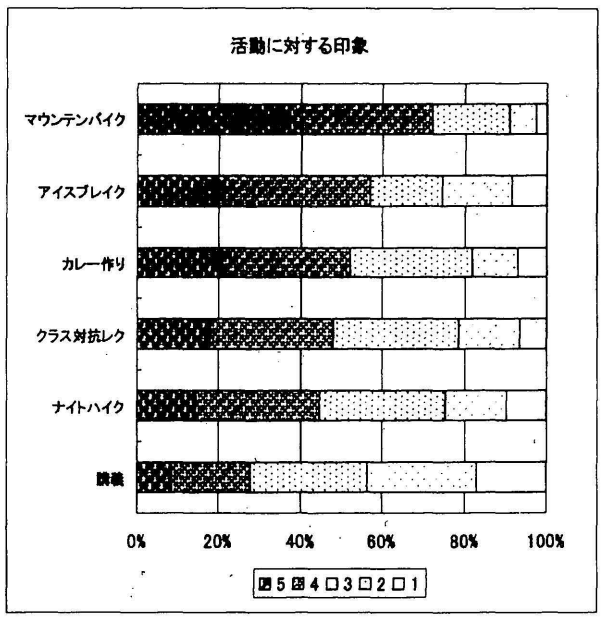

図3　アンケート結果③

※コミュニケーション・キャンプで実施したチャレンジプロジェクト（CP）は、プログラム内容がアイスブレイクの活動と似ており生徒が混乱するため、ここでは、CPも含めてアイスブレイク等とした。

○マウンテンバイクの印象が最も強いと答えた理由

- 一番辛かったけど、一番達成感があった
- 「疲れた」以外覚えていない
- 辛かったけど、一度もMTBから降りずにゴールできた。
- 初めてのマウンテンバイクだったから

・お尻が痛かった
・景色がきれいで、下り坂は気分が良かった

○アイスブレイクの印象が最も強いと答えた理由
・みんなで団結した感じが良かった
・初対面の人と仲良くなることに緊張していて、何とか話そうと頑張っていたから
・みんなとうちとけることができた
・これをきっかけに友達を増やした
・本当に打ち解けられたと思ったのがアイスブレイクだったから

③チャレンジキャンプ」項目の印象度

図４は「チャレンジキャンプ」で実施したプログラムの満足度の高いものから順に並べたものを示している。

この活動では図４に示すように、黒姫山登山に対する印象度が最も高い。これは、距離の長い登山道を使い生徒に精神的・肉体的負荷をかけたことにより、生徒に強い印象を与えたことを示している。

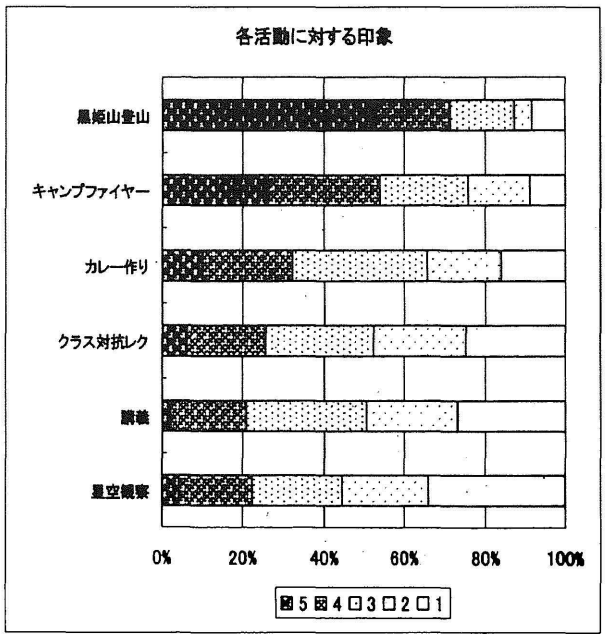

図４　アンケート結果④

○黒姫山登山の印象が最も強いと答えた理由
・本当に辛くて今までで一番逃げ出したいと思ったけど山を登ったときの達成感が良かった。
・泣くかと思った。
・体力的には大丈夫だったが精神的につらい。
・辛かったけど新しい仲間と関わる貴重な体験だった
・辛くてグチばっかり言ってたけど、登りきったあとは本当にスッキリした。
・大変だった。もうやりたくない…。でも頂上は気持ちよかった。
・登りはみんなと話をしながら歩いて楽しかったが、下りは急にコースが変わってしんどかった
・終わりがみえなくてとても辛かった
・すごく嫌だった。
・初めての登山だった。

④教科「産業」

図５に示すように、生徒は「卒業研究」に強い印象を持っている。これは、「卒業研究」が生徒個人で課題を設定し試行錯誤しながら自分の力で問題を解決する活動であったため、生徒の達成感が強く残ったためであると考えられる。しかし、各科目に対する感想をみると、それぞれの科目で生徒は自ら考え悩み行動した姿がみられ、その結果生徒は強く達成感・成就感を感じていると考えられる。

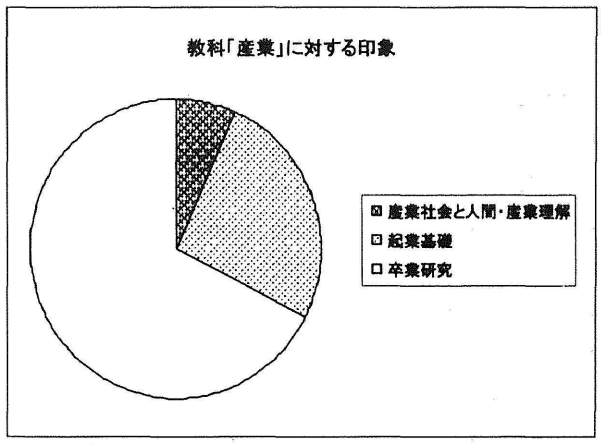

図５　アンケート結果⑤

○「卒業研究」の印象が最も強いと答えた理由
・自分で調べるためにいろいろな場所へ行き多くの人と話したから
・毎日研究をやっていたから
・自分から一番行動したから
・一つのことについて最後までやることができた
・今までにやったことのないことだったので、すごく悩んだりして常に考えていたから
・すごく苦しかった
・初体験のことばかりで自分との葛藤があったから
・自分が本当にやりたいことをやったから
・筑坂といえば卒研だし3年間のまとめだから
・将来の目標を具体的に打ち出せるきっかけとなり、自分の考えをまとめることができたから
・自分自身が一番がんばった教科だと思うから

○「起業基礎」の印象が最も強いと答えた理由

・難しかったけど成功したから

・全く審査に通らなくて大変だった

・起業できなかったから

・とても辛かった。毎週授業が来るのが嫌だった

・みんなと試行錯誤したから

・後悔することが多かったから

・起業できたから

○「産業社会と人間・産業理解」の印象が最も強いと答えた理由

・いろいろなことを体験できたから

・将来の夢を見つけるきっかけとなったから

・少し社会の見方が変わったと思うから

4．おわりに

１４期生では、生徒の自ら考え自ら学ぶ態度を高める取り組みとしてとして新たな活動を取り入れてきた。ひとつは「産業社会と人間・産業理解」における「現代社会を知る」講義、もう一つは「チャレンジ・キャンプ」である。前者は「卒業研究」に向けた教員からの投げかけで、8名の担任・副担任がひとり一時間ずつ自分の得意とするテーマで講義をしたもので、教員との信頼関係を築き上げられた。日頃自分と関わっていない先生の専門分野の講義を受け、総合学科高校の幅の広さを実感すると共に「知る」ことと「考える」ことへの興味を持たせることができた。「チャレンジ・キャンプ」では、登山中に長時間にわたって自己を見つめさせ、戦い、悩ませることができた。誰も頼ることができない登山では、次に踏み出す先を自分自身の責任で決めなければならず、その一歩一歩に自分自身の人生を重ね合わせてもらいたいという願いがあった。とくに、「チャレンジ・キャンプ」は２年次のクラス替え後に実施したのだが、それは「コミュニケーション・キャンプ」で培われた人間関係から脱却できず、新クラスになじめない生徒が多数見られていたことからも、あえて教員が嫌われ役となり、生徒同士の新たな人間関係形成を期待したものであった。

これらの活動は、このアンケート調査によって生徒の印象（思い出）に強く残り、また、生徒が自ら考え自ら学ぶ態度を育んでいることが明らかとなり、期待した教育的効果が達成されていると考えられる。

本校での「コミュニケーション・キャンプ」等の取り組みや教科「産業」の取り組みは、生徒間の信頼関係、教員と生徒間の信頼関係、生徒個人の成長に大きく関わる活動であり、総合学科である本校にとって必要な活動であると言える。

最後に、保護者の協力なくしては本校の教育は語れない。幸いにも１４期生保護者は大変な理解と協力があり、年数回の保護者会でも過去にない人数の出席を見ることができた。多くの保護者の理解と協力は、子どもたちの精神的な安定を生み、学習面や生活態度や本校が取り組んでいる様々な事柄へ、素直に積極的に参加する姿勢を生み出すことができた。１４期生保護者に対して改めて感謝の意を伝えたい。

【引用文献・参考文献】

1. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要　第４５集 (2007)
「第8回　コミュニケーション・キャンプ実践報告」
2. 堀出知里，「キャンプで身に付く「コミュニケーション力」の評価方法を考える」，日本野外教育学会第１０回大会プログラム・研究発表抄録集，2007，pp. 44－45
3. 小林美智子，「総合学科における入学直後のキャンプによる指導実践」、日本野外教育学会第１０回大会プログラム・研究発表抄録集，2007，pp.64－65
4. 建元喜寿，「入学直後の高校1年生に対する野外教育プログラムの評価」国立青少年教育振興機構研究紀要，第8号（2008年）
5. 信州自然大学校 http://www.shinshu-shizen.jp/
6. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第４6集 (2008)
「チャレンジキャンプ実践報告」
7. 筑波大学附属坂戸高等学校研究紀要 第46集（2008）
「起業基礎実践報告」